
隠人（おに）使い<2>

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠人使いく2>

【NZコード】

N4487N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

「厄介な奴だ。」綾は言った。式神が告げた ナイト・メア がいよいよ姿を現す。

隠人使い 第2話です。

狀（福壽丸）

いわゆる、更新中。

京王線 明大前駅のすぐ側にあるレストランで食事を終えた綾と望は駅で別れた。

2時間程前の事である。

望はそのまま上りの電車に乗り、今は血せきになつてこぬマンションへと戻つていた。

井を見上げ、

「総が言っていたナイト・バルで、食事中の会話を思い出す。」

「人の夢の中から出てきてその人が無意識に『欲望』しているものを現実にする奴さ。」

綴はやべ、書いた

聖母子

望はぼけーっと、「それは確かにやつかいな奴かもしれないなー、綾の言う通り。」

「目元目
咳く。

落ちていった。

夢を見た。

姿。ニ・ヤに両親と一緒にいるはずの妹の菜穂が、夕食を作っている

(あれ　菜穂・・・)
小学6年生になつたばかりの、その後姿眺めながら、それが夢
なのか現実なのか、望には判らなくなつていた。
やけに、リアル。

「何やつてんの、菜穂。」

望はその後ろ姿に問いかけた。

「お兄ちゃん、起きたの？」

妹の菜穂が望のマンションのキッチンで振り返り、口元に笑う。「今、お夕食作つてゐるから。お父さんとお母さん、仕事で遅くなるつて。それと」

そこで望の顔を見つめ、「今度のニ・ズの出張ね、菜穂だけじゃなくお兄ちゃんも一緒に行くことになつたつて。」「え？」

「良かったでしょ、お兄ちゃん。」「良かつたでしょ、お兄ちゃん。」

菜穂はキッキンを離れ、望が横たわるベッドの脇に近づいて来た。「お兄ちゃん、本当は一緒にニ・ズへ行きたかったんでしょ？」

「それは……」

「確かに、日本で医者になりたいつていつの判るよ。でも、お父さんもお母さんもアメリカでは総合診療 - - GMとかいつのが発展してて、お父さんもお母さんも一緒にニ・ズへ連れて行いつつて言つてたんだよ。」「本当？」

「本当？」

望は体を起こした。

夢じやなかつた。

今、田の前に妹の菜穂の笑顔がある。

(じや、ここは家?)

望は目をこすつた。

「だから、お兄ちゃん、約束して。」「

菜穂はこいつと微笑んで、「もう一度ど、土御門 紗と付き合わないつて。」「え!？」

その名前により、望は田を見開いた。

「・・・・・・どうこの事。」「

「ね、お兄ちゃん。」「

田の前の菜穂が右手の小指を差し出す。「約束してくれないと、お兄ちゃん、菜穂たちと一緒に乙・乙行けないよ。」

「・・・・・」

時間が。

空間が。

望の中で歪んでいた。

「ね、お兄ちゃん。」

目の前の妹の姿を見つめる事しか出来なかつた。

オキロ・・・・・・

「・・・・・」

何処かで、菜穂以外の声がした。

オキルンダ ノゾミー

その口調の厳しさに、望はベッドから勢いよく起き上がつた。目の前は光の洪水。

それが、室内の電気だと氣付くのにそれ程時間はかからなかつた。何故なら - - - 目の前に、土御門 綾の顔があつたからだ。

「・・・・・綾。」

望は額の汗を拭い、「どうしたの。今、ここに妹の菜穂がいたんだよ。」

「それは夢だ。」

いつもの冷たい眼差しで、綾は告げた。

「お前は今、ナイト・メアに魅入られる所だつたんだ。」

「ナイト・メア？」

望は目を丸くした。「何だつて俺を？」

それから、より一層強く、綾の目を見つめ、

「どうして君がここにいるんだ？」

「お前が持つ式神が知らせたのぞ。」

綾は微かに口元に笑みを浮かべて答えた。

「どういう事。」

「学校の帰りに俺の使いの式神をお前は無意識に持つて帰つただる？」

「式神を？」

望は目を丸くし、そして慌てて制服の後ろポケットに手を入れた。そこには、カラスだつたはずの一枚の白い紙……正確には、中心に五芒星が描かれたもの。

「そう。」

綾は頷き、「それが先刻、俺の所へ知らせに来たんだ。」

「でも、また帰つて来た訳？その式神。」

「俺が命令したんだ。俺が行くまで望の元にいる、と。」

そう言つと、綾はその紙を受け取り、左手の上に乗せた。

「印。」

右手の人差指と中指を額にかざすと、綾はそう一言告げた。

バツ・・・・・

すると、その紙は青白い炎を微かに残し、焼け消えた。

「何、何。何やつたの？」

望は身を乗り出した。

「『闇』へ返したのさ。」

綾は無表情に、「必要以上に『闇』の力を借りてはいけない。それは、いつしか自分を『闇』に身を置く事になるから……俺の父の云い付けだ。」

「そう・・・・・・。」

望は肩を落とした。

しかし、綾へはにつこりと笑い、

「何はともあれ、綾がいて、助かつたよ。俺、綾がいなかつたら

そのナイト・メアとかいう『闇』の人の虜になつていたかもしれない。

「

「そう。それが、彼女の目的だ。」

綾は答えた。「自分の『欲望』（心の弱さ）と引き換えにその『魂』を奪う……そういう奴さ。」

同じ頃。

下高井戸にある家の2階の自室で、井上 遥は英語の予習をしていた。

きちんと片づけられた机の片隅には、赤い携帯電話。

遥は時折、その携帯のメールをチェックしていた。

「優子からか。」

軽い溜息を付く。

遥には片想いの人があった。

1学年上で野球部の少年。将来の活躍を約束された様なエースで4番のポジションの人だった。

遠巻きに何度も練習試合を友人と見に行つた事もある。でも、その人にはもう彼女がいる、という噂もあった。来年の春には、卒業してしまう人。

「はあ。」

友人の仲介で何とかメール・アドの交換は出来たものの、それ以上は何もなかつた。

遥が送ったメールの返事も、ただのメール友的な返事。

「告るしかないかなー。」

パジャマ姿の遥は、机の上に頭を乗せた。時刻は8時をとっくに廻っていた。

「遙、ご飯よ！」

階下から、母のそんな声が聞こえてくる。

「食欲ない。」

遥はそう返事をすると、再び勉強を始めた。

あとは、何とか同じ大学に入るのみ、という想いも彼女にはあった。

たぶん、あの大学に行くだろ'うと・・・・・・

「えつと。何処までやつたつけ。」

右側に置かれた教科書をもつ一度めぐり直す・・・と、その手が止まる。

「あー、眠い。」

そう眩き、「ちょっとだけ。」、遙は再び机の上に頭を乗せた。

夢を見た。

あの人気が試合をしている所だった。

「飯田先輩だ！」

夢現ながら、夢の中で彼を見れた事だけで幸せな遙。その夢の中では、遙はベンチでマネージャーをしていた。

「おい、井上！」

少年がベンチに駆け寄つて来る。「水くれ、水！」

「うん！」

遙は微笑み、青いクーラー・ボックスの中からペット・ボトルを一本取り出し、彼に差し出した。

「ありがとう…」

そう言つと、飯田は再びマウンドへ走つて行つた。

「何か、幸せー！」

遙はにっこり、と笑つた。「こんな夢見れるなんて。」

「このまま、夢で終わらせたい？」

何処からか、女性の声がした。

ベンチに座つている遙が、その方向を見ると一人の金髪の女性が立つていた。

「あれ？夢？現実？」

遙は戸惑つた。彼女に声をかけた女性は、

「私と契約するのなら、貴方の望を叶えてあげてもいいわよ。」

女性は、そう言った。

「契約、つて？」

「遙が尋ねると、「 - - だよ。」

声が遠くて、あまり聞き取れなかつたが、

「飯田先輩の近くにいれるのなら、何でもいいわ。今年の初詣も
飯田先輩と面想いになれますよ！」って祈つたんだから。」

「ふふふ・・・・・・・・」

女性は艶やかに微笑み、「じゃ、貴方の望を叶えてあげる。」

彼女は右手の小指を差し出した。「約束。」

「うん。」

ためらひも無く・・・夢の中だからと思ひ、遙はその小指に自分の小指を絡ませた。

「遙、『ご飯食べなさいっ！』

階下から聞こえる母の声は、遙にはもう届かなかつた。

遙はそのまま机の上で、深い眠りに就いていた。

むすめ むすめ

MDの音楽の中、携帯の着メロが一瞬鳴つただけである。

式（後書き）

暑いと頭がボケる (訳)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4487n/>

隠人（おに）使い <2>

2010年10月8日11時20分発行